



小谷 延良 先生 ～CELTA 取得への道～

IELTS の指導者として有名な東京都市大学の小谷先生。IELTS に関する本も執筆したり、教壇に立って学習者の指導をしたりと精力的に活躍している小谷先生も、世界標準の英語教授資格である CELTA をお持ちとのことで、早速インタビューに行ってきました。

オーストラリアの大学院で学ばれ応用言語学 (TESOL 専攻) 修士号もお持ちとのことで、CELTA との比較や、実際に教壇に立たれている先生ならではの視点でお話を伺うことが出来ました。

今回はそんな小谷先生のインタビューをお届けします。



親しみやすく、関西弁で面白い話をたくさんしてくださる小谷先生

ケンブリッジ大学出版 (以下ケンブリッジ) : CELTA を知ったきっかけを教えてください。

小谷先生 : 2014 年の夏、オーストラリアから MA TESOL を取って帰ってきて確かに知識はついたのですが、理論ばかりで実際に教える機会はゼロでした。だから教え方が上手くなったかと言うと、そうでもなくて…。ちょうどその時本を一緒に書いている方から「もう一度実践的な指導を学んだら?」と言われ、行くならインテンシブに学べ体系化されているものが良いということで CELTA を受けることにし、ケンブリッジにある Bell International College へ行きました。

新しい環境で学ぶことがすごく好きで、オーストラリアから帰ってきてちょうど 2 年経っていたのでまた何かやりたい…と思っていたところでした。コースを探していたところ、開講スケジュールがちょうど夏季休暇中であったことや、挑戦するなら本場でということで Bell を選びました。それに加えて IELTS も受けるというミッションがあったので、ちょうど良かったです。



ケンブリッジ：CELTA コースのクラスメイトの様子を教えてください。

小谷先生：全部で16名の参加者で、8人がイギリスから、その他はカナダ、フィリピン、トルコ、ナイジェリア、スペイン、インドそして日本（私）でした。多様なバックグラウンドを持った人たちが多くすごく新鮮な環境でした。



ケンブリッジ：ついていくのが大変と言われる CELTA ですが、実際に受けてみて感想や気づいたことを教えてください。

小谷先生：MA で読んだり書いたりというのは取り組んできて慣れていたので、難しいというよりもスケジュールのタイトさが大変でした。実際にそのタイトさについてこれぞドロップアウトしてしまう人もいました。また、週末学校は休みですが観光を楽しむ時間はほとんどなくアーティクルを読んだり、授業の準備をしていました。

CELTA に関しては本当に学習者を主体に物事を考えるというのが一番大きな視点でした。私が終了した TESOL の課程はこちら(教える側)からティーチングする理論を学ぶことが多かったのですが、CELTA は学習者がどう考えてどう反応するのかという学習者の視点を大事にしているのが印象的でした。

2日目から Teaching Practice があり、指導官は優しいのですがフィードバックがいい意味でとてもストレートで…(苦笑) 「あなたはなぜそんなに余計なことを授業で喋るのか？」と指摘されたのを覚えています。Teacher Talking Time (TTT) が長ければ、それだけ学習者の活動時間を奪ってしまうということで早速2日目から指導を受けました(笑)

また CELTA では、自分自身のティーチングと向き合うことができたことがとても大きかったです。MA TESOL で理論しかやっておなくて、分かっているつもりでしたが実際に学習者を前にするとなかなかうまく行かないこともあって…。



参加者同士でフィードバックを与え合う機会もあり、クラスメイトは必ずしも教員経験のある人たちではなく全く別のフィールドで活躍している人たちだったりもするので、その分新鮮なフィードバックをいただいたりしました。



ケンブリッジ：今のティーチングにどう活かされていますか？

小谷先生：先ほどお話しした教師の発話時間 Teacher Talking Time を短く最小限にすることに加えて、Teaching Plan を組む際に活用できています。具体的には1時間でどういった Interaction を行うかということです。つまり「教師と生徒のやり取り」、「個人で行うワーク」、「ペアやグループで行うワーク」といったようにやり取りの主体を明確にし、その割合を考えることを意識するようになりました。さらには、「守破離」の発想に似ていますが、活動する場合は Controlled（全て指示通りに型にはめてさせる）→Semi-controlled（部分的に指示通りにさせ、生徒が自由にできる）→Free（生徒が考えて自由にできる）といった手順を踏んで活動の流れを作るということです。

もう一つ、今でも実践しているのが最初に教科書でルールを教えるから、「はい問題やってね」、というアプローチ（Deductive：演繹的）ではなく、最初にある程度、例えば文法なら例文だったり提示して、生徒が自分自身でルールに気づいてくれる工夫をして、生徒が理解してから実際の活動をしてもらうという指導方法（Inductive：帰納的）を多く取り入れるようになりました。

ケンブリッジ：CELTA で学んだことは、小学校～大学までどんな学校の教育現場で活かせると思いますか？

小谷先生：中高から大学、社会人まであらゆる年齢層に活かせる部分があると思います。今までなんとなく行っていた活動が、これはこういった根拠や意味があってやっているんだな、と理解することができます。さらには、指導者がどのように活動をファシリテートし、どういった手順でインプット、アウトプット活動を行い理解や活動を促すのかといった点を理論+実践の両面から学ぶことが可能です。これらのプロセスに関しては学習者の年齢やバックグラウンドに関係なく応用することが可能です。



さらに学習者を主体とした指導法が求められる将来のことを考えると、先生方にはぜひ行っていただきたいと思います。実際 CELTA のやり方や理論が全部自分のコンテキストに当てはまるとは限りませんが、そこから学べることはたくさんありますし、自分自身の指導法をもう一度見つめ直す絶好の機会になると思います。学習者主体で考えるチャンスを与えてくれるのがこのコースの一番の醍醐味だと思います。



ケンブリッジ：MA TESOL と CELTA どちらをやるべきか迷っている先生方が多いのですが、小谷先生だったらそんな先生方にどんなアドバイスをされますか？

小谷先生：MA であれば時間をかけてゆっくりと学べるのがメリットだと思います。ただし、教育実習 (Teaching Practicum) の機会があり「実践+理論」をバランスよく学べるコースがいいと思います。対照的にインテンシブな環境で短期間で学び即現場で活用したいというのであれば CELTA がお勧めです。

ケンブリッジ：今後の抱負をお願いします。

小谷先生：去年まで高校で教えていたのですが、現場の先生方がオールイングリッシュで教えることに苦手意識を持っていたり、でも熱意はとてもある方々がとても多くて、そんな先生達のプラスになるような取り組みができればいいなと思っています。今は活動の幅も広がってきたので、CELTA やアカデミックイングリッシュの学位なんかを活かして、もう少し実践を積み重ね学習者のレベルアップだけでなく、指導者の方々にも何か有益な指導法や実践をシェアして還元していきたいと考えています。

ケンブリッジ：これから CELTA を取る方へ、メッセージを！

小谷先生：もし CELTA を取るのであれば、やはりイギリスかアメリカに行かれるのが良いかと思います。日本のコンテキストから離れて、違う環境で学ぶのも新鮮で良いと思いますし、やはりその方が苦勞するのでそちらをお勧めです。

ただし、CELTA はネイティブに近いレベルの英語力があることが前提なので、少なくとも C1 レベルの英語力を付けた上で新たなステップアップに挑戦して下さい。みなさんのさらなる飛躍を応援しています。一緒に頑張りましょう！

